

第三回「大学生のホームステイ～グローバルな人材とは～」

今回のエッセイでは、今現在のこと、つまり大学2年生の夏のことについて話そうと思う。大学生になった私は、今度は国際交流を支える側として、すなわち運営側として参加しようと思った。私が過去2回参加した国際交流プログラムでは、大学生がスタッフとして現地に



写真1：ホストファミリーとの一枚

同行できる。主な役回りは何か問題が起きた時の対処、参加者のケア、ホストファミリーと参加者のかけ橋になる、等だ。今までの経験を活かして新たな形でホームステイに貢献できたらと思ったのだ。

また滞在中、スタッフも一個人としてホームステイをすることができる。大学生になった自分が、ホームステイでどんなことを感じるのか、どんな体験をするのか興味があった。

まず、スタッフとしてホームステイプログラムを見た感想を述べようと思う。ホームステイにおいて英語というものは、参加者が思っているほど大きな意味を持たない。もちろんできるに越したことはないし、喋れば喋れるほど良いというのは確かだが、英語ができればホームステイは成功するというのは大きな間違いだ。いくら学校での勉強ができて、ホストファミリーとコミュニケーションをしようという意志がなかったら、ホームステイが成り立たない。“Thank you”を言う、笑顔やボディランゲージでコミュニケーションをとる、自分の意思を伝える、何より楽しかった、嬉しかった、美味しかったなどの感情をちゃんと伝えることが、良いホームステイをすること、つまりホストファミリーと良い関係を築くことにおいて重要になる。「アメリカに1ヶ月いられる英語力」が試されるのではなく、「人として他人と良いコミュニケーションをとれるか」が鍵になってくるのだ。この事実は私をなんとなく拍子抜けさせる。「国際交流」という言葉は、とても大きくて重要でまるで石碑に刻まれた古代文字を連想させるのに、そこにおいて大切なことが至極当たり前なこと——つまり、日常生活に転がっているようなものなのだ。「友だちと仲良くする」なんて5歳の子どもでも知っている。「ありがとうと言いましょ」「人に親切にしましょ」「嘘はついてはいけません」、どれもがとても簡単な、まるで小学校の標語のようだ。この事実を思

うといつも、私たちは物事を難しく考えすぎているのかもしれないと思う。違う生活圏の人々、異なるバックグラウンドを持つ人々と交流する、親しんだ生まれ育った国と離れるというのは、とても難しい言葉で表現することが可能だ。「国際交流」「異文化交流」——その言葉の難しさに時にだまされているのかもしれない。シンプルに考えれば——そのシンプルさがすごく難しくもあるのだが——見えてくるものがきっと確かにあるのだろう。

次に参加者としてホームステイをした感想を述べよう。ホームステイした家族は5人の子ども（1歳半～10歳）を持つ大家族だった。上の2人が地元のコーラスグループに属していて、そのコーラスグループに家族ぐるみで参加した。当たり前だが、コーラスのキャンプでは全てのインフォメーションが英語で伝えられる。また、たくさんの人と英語で会話をする。ちょうど3年前、オーストラリアで高校に通っていたように。そんな中で私の脳に起こった大きな変化は、英語処理能力の飛躍的な上昇だった。英語の情報をキャッチすること、また英語で話すことを脳が優先させるようになったのだ。ホームステイにおいて英語はそこまで重要ではないと先に述べたが、組織（例えば学校）で英語が理解できないということは死活問題になってくる。英語の情報が分からなければ、次にどこに行くとか何をするとか、今何をしているかとか、そういったことが全部流れていってしまう。そう考えると、6年前にホームステイを経験し、また3年前に高校に通う機会を得たのはとても良かったのだと思う。同じように見えて全く違う経験を、私の英語が許す範囲で最も良い時期にできたわけだ。



写真2：たくさん子どもたちに囲まれて

これまでの国際交流体験が私に教えてくれたことは、自分を外から見たとき「この人と話してもいいな」と思えるような人になろうということだった。人間として退屈しない、それでいて何かを受け入れられる余裕のある人になろうということだ。そこには前半に書いた良いコミュニケーションを取れるということも当然含まれている。ひょっとしてこれは、国際交流じゃなくても学べることで、高い買い物だったかもしれないが、今のところこの私はこの買い物に満足している。この買い物に対して違う考えを持つようになったときがあれば、

それは私が国際交流に対して新しい考えを持つようになった印だし、その先にはまた新しい形の国際交流があるのだろう。

このエッセイを書く機会を得られて、また人に読んでもらえる機会を得られて、非常に幸運に思う。私がこのエッセイを書くにあたって、手助けをしてくれた全ての人に感謝の意を示したい。グローバルな人材を目指す人々の助けになるようなエッセイを書けたかはわからないが、なんとなくこんな人もいるんだなくらいに思ってくれたらと思う。反面教師にするもよし、さっぱり忘れてしまうもよしだ。

毎回楽しくエッセイを書くことができた。お世話になった方々、また3度もプログラムに参加させてくれた両親、全ての人に対してありがとうを言いたい。